

第1章 調査の目的と経過

1 調査の目的

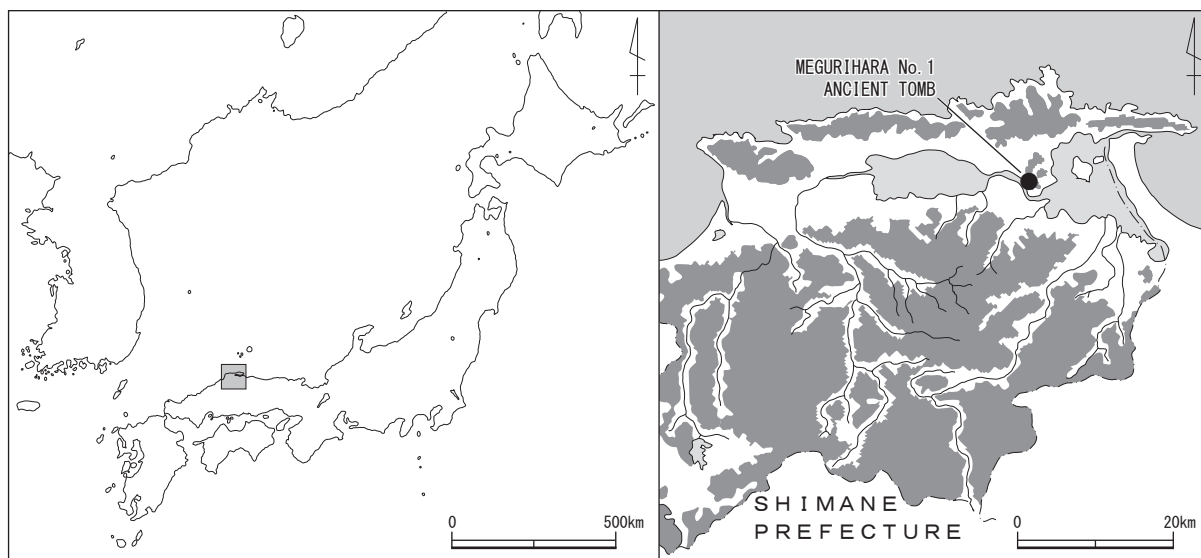
古墳時代が終焉し、律令国家が始動する7世紀は、日本史上の一大画期である。この社会変動が「出雲国」成立の契機であることは文献史料にうかがわれるものの、古墳時代社会から律令社会へと至る過程の連続性と飛躍の実態を考古学的に説明するにはなお材料不足の感が否めない。

そのなかにあつて、「出雲国」成立前夜にあたる古墳時代後期から終末期において、出雲地域では在地性を顕著に保持した墓制が展開していたという理解は、地道に進められてきた当地の考古学研究がもたらした重要な成果の一つである。前方後方墳、出雲型子持壺、出雲型石棺式石室などにみる墳墓の諸要素は、出雲地域が畿内地域など他地域とは異なる墓制を展開していた可能性を示す。もちろん、岡田山1号墳出土の「額田部臣」にかかわる銀象嵌円頭大刀をはじめ、倭王権の本拠地である畿内地域との関係性の強さを示す文物が少なからず出土する点もみのがすことはできない。

そうした脈絡とともに、出雲地域において古墳時代が終焉へと向かうなかで重要視されてきたのが、島根県松江市に所在する廻原^{めぐりはら}1号墳である(第1図)。廻原1号墳は畿内地域の終末期古墳でみられる横口式石槨をもつ出雲地域唯一の古墳とされ、その受容を契機として在地の石棺式石室が変容し、古墳築造が終焉するという理解がある〔出雲考古学研究会1987など〕。廻原1号墳の埋葬施設が横口式石槨であるならば、出雲地域と畿内地域の関係を明らかにするうえで有効なばかりか、より具体的な比較検討がなされれば、畿内地域との時期的な併行関係を追究しうるようになる。いっぽうで、出雲地域の古墳築造終焉における廻原1号墳が占める位置の大きさを考慮すれば、その埋葬施設を横口式石槨とする評価それじたいの可否をあらためて問うことも必要であるといえよう。

以上のように、廻原1号墳の実態を解明することによって、古墳築造終焉期における出雲地域と畿内地域など他地域との関係性や、出雲地域の自律性がいかなる内容であったのかに迫ることが可能となる。それは、出雲国の成立背景を考古学的に実証するうえでの重要な手がかりとなりうる。

こうしたことから、島根大学法文学部考古学研究室では出雲国成立前後の考古学的な検討材料の基礎的な整備を目的として、廻原1号墳の発掘調査を実施することとしたのである。(岩本)



第1図 廻原1号墳の位置

2 調査の経過

廻原1号墳について考古学的な調査を実施するという機運は、出雲地域における古墳時代社会から律令社会への転換の一端を明らかにしようとする共同研究を立ち上げたことにはじまる。

角田徳幸氏（当時：島根県古代文化センター）の案内のもと、大橋泰夫（島根大学法文学部教授）と岩本崇（島根大学法文学部准教授）が松江市朝酌町・持田町の石棺式石室を中心に古墳踏査の機会を得たのが、2009年4月25日である。これをふまえて考古学研究室内で議論をおこない、廻原1号墳の実態究明を喫緊の課題として掲げ、調査実施に向けて本格的に動き出すこととなった。

そして2009年6～7月に調査実施計画の具体的内容を検討し、同年10～11月に古墳の土地所有者と地元自治会にたいして研究室の意向をお伝えし、調査実施にあたりご快諾をいただいた。

測量調査（第1次調査） まず古墳の現状を把握するために、2010年3月7日～10日ならびに9月19日～21日の7日間にわたり、周辺地形を含めた測量調査を実施した（第2図-1）。調査の実施に先立つ、2009年11月20・27日、12月4日に測量基準点の設置を「考古学実習Ⅰ」の授業時間を利用しておこない、2010年2月4日に基準点へ世界測地系座標ならびに東京湾平均海面（T.P.）にもとづく座標値と水準値を移動した。基準点の測量は、株式会社エイテック（島根県松江市）に委託した。測量図は20cm間隔の等高線によって作成した。原図の縮尺は100分の1である。測量調査は、島根大学法文学部山陰研究プロジェクト『「出雲国」成立過程における地域圏の形成と展開にかんする総合的研究』（課題番号0901・研究代表者 大橋泰夫）の一環としておこなった。

発掘調査（第2～5次調査） 発掘調査は2011～2015年度の大学の夏季・春季休業期間などを利用し、4次にわたって実施した。この発掘調査を第2次から第5次調査とする。

第2次調査は、埋葬施設の残存状況の確認、墳丘形態・規模の把握を目的としておこなった。埋葬施設とその周辺にあたる墳丘南側に、トレンチを3ヶ所設定して調査を実施した。調査期間は2011年2月19日～7月29日である。調査期間は6ヶ月という長期におよぶが、春季休業期間が終了した4月以降は休日を利用した作業であり、実働日数は69日である。調査の期間中前半は、山陰でも稀にみるほど降雪が多く、調査がしばしば中止を余儀なくされた。調査の結果、当初の目的をほぼ達成したが、そのいっぽうで埋葬施設の上部構造が特異なものになるのではないかとという新たな課題も浮上した。なお、この年3月11日に東日本大震災が発生したが、その報を受けたのはまさに発掘調査中のことであった。また、3月26日に現地説明会を開催し、多数の参加者を得た。第2次調査は、平成22・23年度島根大学「萌芽研究部門」研究プロジェクト『「出雲国」成立過程における地域圏の形成と展開に関する総合的研究』（研究代表者 大橋泰夫）の一環として実施した。

第3次調査では、先の調査で得た課題である埋葬施設の上部構造を確認するため、墳頂部にトレンチを設定して調査を実施した。調査期間は2012年9月3日～28日であり、実働日数は24日を数える。調査の結果、上部構造を把握するという当初の目的をおおむね達成した。あわせて、埋葬施設の上部は調査終了後に埋め戻すため、大手前大学史学研究所のご協力を得て、同研究所の岡本篤志研究員による三次元デジタル計測を実施した（第2図-2）。調査の終盤、9月22日には現地説明会を実施し、多くの方々の参加があった。第3次調査は、島根大学法文学部山陰研究プロジェクト『「出雲国」成立過程における地域圏の形成と展開にかんする総合的研究』（課題番号1201・研究代表者 大橋泰夫）、ならびに島根大学法文学部授業科目「考古学実習Ⅰ・Ⅱ」の一環としておこなった。

第4次調査では、墳丘の形態・規模・構造の把握を目的に、墳丘西側と北東側にトレンチを設定した。

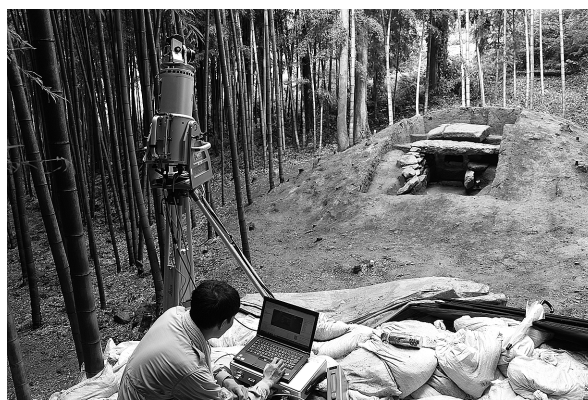
調査期間は2013年9月4日～10月14日である。実働日数は27日である。調査成果がほぼ確定した10月5日に、現地説明会を少雨のなか実施した。調査の結果、墳丘裾の位置を2ヶ所のトレンチで確認したが、検出範囲が狭く、墳丘北東側の墳丘形状の把握に課題を残すこととなった。また、墳丘西側については、墳丘下半の構造について結論を得るに至らなかった。いくつか課題を残すこととなったが、その追究は調査体制をあらためて試みることにした。なお、第3次調査時に埋葬施設の上面を中心に三次元デジタル計測を実施したが、機器の大きさから内部の計測については断念していた。そこで第4次調査では小型の機器を用いて、あらためて大手前大学史学研究所の岡本篤志研究員による計測を実施した。第4次調査は、島根大学法文学部山陰研究プロジェクト『「出雲国」成立過程における地域圏の形成と展開にかんする総合的研究』（課題番号1201・研究代表者 大橋泰夫）、島根大学法文学部授業科目「考古学実習Ⅰ・Ⅱ」の一環としておこなった。

第5次調査はそれまでの未解決事項を解決すべく、埋葬施設と墳丘の構築過程の解明、墳丘規模・形態の確定を目的に実施した（第2図-3・4）。第3次調査の墳頂部、第4次調査の墳丘西側と北東側に加え、墳丘東側と南西側にも新たにトレンチを設定した。トレンチは5ヶ所である。調査期間は、2014年9月6日～30日、2015年3月9日～4月19日であり、実働日数は48日を数える。成果がほぼまとまった4月4日に現地説明会を開催した。若干の調査を春季休業期間以降に残したが、4月中にすべての調査を終了し、足掛け6年におよぶ廻原1号墳の調査に終止符を打った。第5次調査は、島根大学法文学部山陰研究プロジェクト『「出雲国」成立過程における地域圏の形成と展開にかんする総合的研究』（課題番号1201・研究代表者 大橋泰夫）、島根大学法文学部授業科目「考古学実習Ⅰ・Ⅱ」の一環として実施した。

整理作業 5次にわたる調査の終了後に順次、整理作業を実施した。第5次調査が終了した2015年4月以降は、正式報告書（本書）作成に向けて、



1. 測量調査（第1次調査）



2. 三次元計測（第3次調査）



3. 発掘調査（第5次調査）



4. 現地説明会（第5次補足調査）

第2図 調査の経過

図面のレイアウトやトレースを進め、調査参加者が分担して原稿執筆にあたった。また、出土遺物の復元や写真撮影などの作業なども進めた。なお、正式報告書刊行までの過程で、以下の概報を刊行した。調査の進展により所見を変更した部分もあるが、本書で示す調査所見を最終的なものとする。

1. 島根大学法文学部考古学研究室 2012「島根県松江市廻原 1 号墳発掘調査概要報告 I」『山陰研究』第 5 号 島根大学法文学部山陰研究センター pp. 73-94
2. 島根大学法文学部考古学研究室 2013「島根県松江市廻原 1 号墳発掘調査概要報告 II」『山陰研究』第 6 号 島根大学法文学部山陰研究センター pp. 109-124

調査体制 測量・発掘調査は、島根大学法文学部考古学研究室を主体とし、廻原 1 号墳発掘調査団を組織して実施した（図版 30）。調査団は、以下の参加者で構成される（所属は当時）。

現地調査は、大橋泰夫（島根大学法文学部教授・調査団団長）、岩本崇（島根大学法文学部准教授）、平郡達哉（島根大学法文学部准教授）、及川穰（島根大学法文学部准教授）を担当者として実施した学術調査である。また、調査の過程で、会下和宏（島根大学ミュージアム准教授）、角田徳幸（島根県古代文化センター・島根県教育委員会）、岩本真実（島根県埋蔵文化財調査センター）の各氏から惜しみない助力を得た。5 次におよぶ現地調査に際し、参加した学生は総勢 32 名におよぶ。学生諸君の存在こそが、調査を進める原動力であったことをここに明記しておきたい。

第 1 次調査の参加者は、大橋泰夫、岩本崇のほか、森藤徳子、幸村康子、橋本友美子、古橋渉、矢頭翔、佐々木友紀、柴田康磨、立谷聡明、三角のぞみ、森本のぞみ（以上、島根大学学生）の 12 名である。

第 2 次調査の参加者は、大橋泰夫、岩本崇のほか、鈴木圭（島根大学大学院生）、森藤徳子、佐々木友紀、柴田康磨、立谷聡明、森本のぞみ、横山聡子、佐野桃乃、高橋里沙、東野純子、中島強、安井健太（以上、島根大学学生）、奥山貴（大手前大学大学院生）の 15 名である。

第 3 次調査の参加者は、大橋泰夫、岩本崇、及川穰のほか、鈴木圭、田中大（以上、島根大学大学院生）、立谷聡明、高橋里沙、磯貝龍志、日浦裕子、藤井雄一（以上、島根大学学生）の 10 名である。

第 4 次調査参加者は、大橋泰夫、岩本崇、平郡達哉のほか、立谷聡明、磯貝龍志、日浦裕子、藤井雄一、千賀祥子、田中亜佑美、手島奈緒、中井嶺花、福本亨充（以上、島根大学学生）の 12 名である。

第 5 次調査の参加者は、大橋泰夫、岩本崇、平郡達哉のほか、磯貝龍志、藤井雄一、千賀祥子、田中亜佑美、手島奈緒、中井嶺花、福本亨充、飯田周恵、犬山雄太、鍵碧、笠見幸帆、佐藤襟、若山俊介（以上、島根大学学生）の 16 名である。

なお、上記のメンバーのほかにも調査過程において、今田賢治、川井優也、角原寛俊、藤川翔、高村優花、灘友佳、藤原唯、寺岡奈穂子の諸君（以上、島根大学学生）からの助力があった。（岩本）

3 謝 辞

現地調査の着手から報告書刊行に至るまで、6 年の歳月を要した。発掘調査の実働日数は 175 日に達する。この間、じつに多くの方々からご支援とご協力を頂戴した。地権者の吉岡智幸氏ならびに吉岡トミ子氏をはじめとする地元住民の方々、島根県内はもちろん各地の研究者各位、学内の教職員や学生諸君、さらには松江市教育委員会、島根県教育委員会の諸機関から調査に際してご支援とご理解、ご協力を得た。ここに記して篤く感謝申し上げる。（大橋・岩本）

引用文献

出雲考古学研究会 1987『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会